七部集大鏡

冬の日　一

雲英

冬北日

信濃何丸撰釋

凡猪書北冬の一句ハ光りを添るゆゑ又冬の一句
空元亀こるこの又の冬何ゆへハ一句ハ成まこるこの
附ける一ー猪書ゆくても海亀きの句まそ例の
六指ける一ー猪書とかの句とて死ましるもむハ
狩くくてうる一ー さまたもの猪かまそ俗人の
二字を字眼とす俗冬聚名を切ヨスルゆゑ此
猪おすとも一句を空え侍るを何故ハあの
句を成くるやといふより狂歌の才士をハ歌ハ
しまひめ俗人の二字を家にの歌を下心
よくくみきまるゆゑ家眼なり

冬

狂句本くくれ冬の侍ゆゑ
消わひぬうはくくの人の林れいるハ身をさいのう
しれ歌のをくは拾を家に此歌ハ北ひ合すま
八中し世ハ句わひをくうゆゑ又歌くあるま歌聚
よくくもの歌を吟しの一して句情れ細みを感す
句一正風興立の一句冬れ日一部の大事句まハ
法花まくくの第一狂句の二字をあるうよ
しなといふを惑説句くと新一しを後句を狂句
の二字をくはくくあるまるのの歌
亀をまくくの日一部の月歩れ二字句五巻
ぬれ句ひよ秀句れ聖とハ狂句れ射を取句の
句一句立の世を意ハ角を山茶花ハ冬の
本くくとまてよ此句句と眼とをうけ冬句
まをを幼一しの甲子吟りの本書を當國

松本より出て奈良井へ此後の後江戸へ交易
して當時の偉物の御師何のしれ事に肱蔵より
おほん狂名ある事しと書傳へけてあの洞に竹
杖の名のそ知若杖と書てやへ医者といひしれ
通称ある所に年三十雜和若杖と号せし
まとりき竹杖をてけうる家職あまたへ次々者に病
あまうすくありゆきく業のたのしくうちうる
をきえうきりて該函をのせ狂し終に狂歌の奴と
なりしをのせさよ其ものゝをしなり祖父様は武家
ままそなりなりし小身の士足にして例の士たるに
あらやに医と同家なり既に幻住庵の記にも
任官を望の深くもうらむと祥に八のし深く
主人に代る事也身に流はさるをまぬうきりての
俳猶ほ適ありて終に俳諧の奴とぞなる其の日

のあらましをきくに笠ハかつらひ紙衣ハ世の人もきた
ならむなりきたにおほえて昔狂歌の才士竹杖為軽と
いふもののまうの函をも俳狂をしつれにおもひ合せて
竹斎と號身を不肖なるなれ似てかゝるに似て飲
しまうなるなり一書に傳ふるかゝるときこゆる
といふ説をも暮しきひつきとなりと是をも終にいふ
類のふりまて本名なる様の所なりなんと按てきけ
をうちつひるなり世にふるまひのふりと唱えはべる
りしきるなり傳すに曰ふるまうひるかくさ服又
うさりに一つのほ天地自然の理にして一大事
なり多く似てあるをとうちよ世の人に服するを
やとうちみうるなりいふ故定紀れあるなるを
傳ふるに法ともいふなりそまたを俳諧に傳る受
口決なりといふ族をて蕉門の授示を手にとる人に悔し

世を移しさいたんうすとを知矩とをそ和を
ちうあ上仕すう一一
書を曰さいたをうとして一書を壮撰の書うてのう
人恵用捨れうおうう大うし支考うあさむきてう
うを混して誕毒をうあうう不すく形うしおそう
ゑ

たそやとはう茅を生れ山菜花
一書上詩やとを紙とすみてよむとを花形り
どとんうとよむ世を水ゆうのこうを考う
まかをうさうう旧本上上濁りをつけ
さまをとはうとよむ上細すを不白れ行
言上仕すう人を詩とうけて笠上山菜花の
みうまちうをを世を考て色紙をとうを花色
の賠詩をう老人をを法く仕をとハつく

とをとうしとをいうを是をや上花未形くの
ふくうをとをしすうをいうをうハをへ不通
韵をてうをふはまうをうをちををうをうて
成美大曰竹うを物詩をわ三を利形日数つう
て法例の宿命名古屋上茅花上茅花をうをひうを
所上宿をうて番板をうを出しをを形を
をのうををまて彼紙をいをふ布をうを法寺帯ハ
赤線れ九をけ上拍をうをいうをすひうを紫
紬のをうんををしのけをのむをう茅形しをう
をう行齋業医善狂欲住尾張名古屋後生
江戸神田覚文寺同人　又曰八雲御抄巻三
霞條下上ふをハ紙をとはしふと古人の説と
又曰枕草紙上ふれ源をうをうをうをうをうをうを
上仕をてをうしを仕をけしるいをとをう

[illegible]

愚考云 [illegible] 角れこぼしつるを新に自一統其
の歌に又曰 [illegible] 嫁の [illegible] 弁にくるしふをれうしふ
あるまきものはすふ歌須の [illegible] 實朝 [illegible]
通音なり [illegible] 山菜花を詩や [illegible]
と [illegible] 眼なり一書に [illegible] 山菜花をさしてし
ひたしなりとかとかとかし [illegible] 眼 [illegible] 通
なり [illegible] 山菜花とは [illegible]
を [illegible] 人なの [illegible]
[illegible] 山菜花 [illegible]
なり [illegible] 人れ [illegible] 山菜花 [illegible]
なり [illegible] 人れ [illegible]
[illegible] 此 [illegible] 利 [illegible] 知 [illegible] 注

すなり [illegible] 酒盃 [illegible]

者曰 [illegible] 酒盃 [illegible]

一書に [illegible] 酒盃 [illegible] 六条本 [illegible] 役人
[illegible] 酒盃 [illegible] 又一説に [illegible] 村 [illegible]
[illegible] 酒盃なりて天子一上酒をたまふとき [illegible]
説に又叶 [illegible] 酒をたまふとき [illegible]
なり又曰堀川 [illegible] 小 [illegible] 琴因盃 [illegible] 酒盃 [illegible]
[illegible] 又一書に [illegible] 酒
[illegible] 酒
[illegible] 愚考云 [illegible] 水の造酒
[illegible] 藏 [illegible] 曰孝德天皇
大化五年 [illegible] 八省の中宮内

省の下大膳職木工寮大炊寮主殿寮典薬寮
掃部寮正親司内膳司造酒司宍女司主
水司皆是宮内省の所管なりて八省官の
吋造酒司主水司は二度を経たる後に司
の造酒司を差置すべき沒なり神酒の事
なりといふ神代巻曰吾田鹿葦津姫ト定
田と号けて稲名田と云ふその田の稲をもて
天甜酒をかもして嘗之又太田命侍祀る伊勢
諸伊特冊尊所生和久産巣日神之児豊宇
賀能売神月天より降坐善酒を醸造法
神代より造り来る酒を主水の官にて造る
いとまなし全侍酒を造るといふ白よはあらん
酒屋造るよあらんやいづれにもせよ
やうやうにいとなりとなる論するはたらあ俗也

又一書に行成と主水と
ようようとなりとなむ行成は主水を歩越なりとなる
なりて呼ること主水を眼前にして歌人倫なる此
歌の外にもあるなれば八幡くるるに
号笠曰主水を水なれば
酒を注ぐべき謂なり

うらはれ注ぎを物なれ　赤馬

意味なり主水
是考赤馬と限るなる沒意味なり主水
は酒屋造らするを都と注しと定めて万葉
は歌にもなり極りなるものなるすべらきを神は
しまをを赤弱のなるなる田井を都とするつ白なる
なる是なるなるなるこなる沒撰なるなるなるなる
赤なれは色を白なる面白し
芝山曰五戒内なる西の俚言は酒をとれば赤

よ事といひ伝へたる酒店へとりて飲を赤ゝるよ踊て達よとりて是酔の興よ事てそのすゝむと云
るなり

朝鮮のかなりすきれ自ひるを

是を曰湯気初てうすくなりこのまゝきをよ
初ひとりよ朝鮮すきよ限られ是を是ふれ同
しすみきるなりもれ是薄の本姿こ
亀考孫氏よ為行のまゝと明く陸よ出はまろ
日のあ初ひを行れ茶の産を出ハ陸よひろる
毎よろれ出てよ日のきらめくとまるり細と
すきを陸よひめるるやられまてやら
日れるなるとまれきしひれるるる
るり敬遠れ伏をを時ひまるる一又方茶
の扮よ仙茶を妙とを自きを陸けてよこ

ようひとを毒きよ陸てい朝るりと云て
赤るよ自れる陸ういと感あり
日れらりしよ米を刑
是を曰米を荷をいれ一の鄙言るり方を西減
の亀鄙よてをいれ陸ち自て達縁るり日れちり
を日れまをふのらむとする形るり
我尾を是よ宿るれるるて
髮をやるを是の方れと
一書よ業平れ使をを出て悲ひて製をを
やすと陸るりるるる一を五中将二条れ后いを
ををるるとれりをれ河義満ようりてせるるを
をを一業平敬信の製を切てをり業平製をを
やるむとをりを是るるを陸ち略ようるを乳れみむ
と吾事れるを一ヤを是るとるるむ

愚考求を

荷ようの法くき業平紙の併まを似さうに
さまこと製をとんやすといふるまて三角れわさ
まをなるふさうしるう伊勢ものうるみむかし
心法きくて色さいの外なるをとこ書国といふ
よ家法ろのて法うそこれと明のるのるる
宮くくふさいとるるきかくのいるのる
く田ろうむとてものの男なるをえていみしの
すきものれく出日さやとてあ法るわこへまう
そまこえとそく一書還俗ハんといふ非るの一し
いほそのうのうとし乳をおりまて
きそそあとくはるのすこしとし法
新法の暁ふうく山ハを焼て
一書曰ひろうふこうこまてる毒るの異ふ
うふこうひをうけて髪をきそまあるを推き

ものまて引とるまふ女の併よまるうこ
次ふ法ゆへよ乳をすてるといふ一人の男
るをうるひるる女房るくまていまく卒
新醤れ文字の消ふ為ふ法ふまるのさる方
まるこのはし図西れるるるるるのの人りて義の母ふ
を法ふ法新まるうふ人まはは紙ふく
れまて法ふをとはのるなるれ感
するふあるまは見
毒笠曰ふるうしるるるる
るの併この眼よすりていうる誠とれるまは母
の髪情を法ふうる法物りてりる髪まて
ふるるきや髪るるふと眼義卒新醤とみしま
消うまむよ消ふふ変このと髪ふけれふを
出めるこの二るの間よ法りまふるるの髪まて
あるれ俗の字まて法ゆふ一るよ一るの法けと

いつもれるり妙不とて[illegible]
とゝ　題考虚實れ西端よりまつりて世人ふ
ゆ[illegible]

ひろしゝ爰ふ　ゝゝ　虚家
田中れるふ万ふ　柳　蓼る出ろ
雪ふ[illegible]ねひく人ゝちむゝ
題考ふまむ柳ゝ津西田中るり蓼るれら
家ゝ芭蕉の俳と見て　小万　柳ゝ蓼ゝ
芦ゝ津西西れ芦ゝ高仁の一名ゝて
淀川のすちるり大和れるふ文むり
吏蛾して淀るふ[illegible]さいゝむゝく
和義のゝまゝれて女蓼ゝ京都へ出て
[illegible]ゝゝゝゝゝは芦ゝて世の
ゝ[illegible]ゝゝゝゝゝゆ[illegible]略す

後の名ゝその場の俳ゝて淀川の戯西ゝ
むゝふ伊勢の淀洲と説来るハ大形る
杜撰なり　すべて俳るゝ蓼名を吟味し形
後れ俳ゝ古ゝろを入て見ゝゝて名主の本
意ゝるゝむゝれみるゝ今する俳諧のゝふ
ゝれ不ゝるゝゝるゝのみなゝむするて
とゝりゝゝゝゝゝゝゝ
二の足ゝ蓼の花ゝゝわゝく
蓼ゝゝむゝゝゝゝゝゝ鼻ゝむ
一書曰一蔦二蔦の女中尼ゝゝゝを一の尼二
の尼といゝゝの所家ゝ下居ゝるゝゝて
その尼ゝ蓼盛の世の物ゝをゝくゝふゝハ
蓼ゝむゝゝと外ゝ消ゝむゝの
ゝけゝ　蓼ゝ曰とゝりゝゝゝゝいやゝ

まのあたりすむ所の中嶺ひと定に一の尼とく
よりおり落してすむなるべし二の尼もおくれて
後前をおもふるなるらむ甚吹道なりさて一所に
宮仕もし一の尼れはなほかしくそて住ふ所ねまる
とめて詠る所るむ一の尼宮中れは雅びな昔
なほかしく詩琴わし二の尼は遊糸の苑をむ
うしなかりしや御の妻の御きていなりにおもとおもふの
なりてより後のさまあらしはね物になりむまからくへ
よき身のなりありてやとなくや情し給まさ八分く
すら数月雪の夜よりの方まさもて篳篥を給ふ
嫉みとの見ぬも美しと女のからしく宮仕の心よしたる
そのしる身まてはと蘭落してものいふさる
女の情なるかなしくなるべしや此両人ともにすてて
宮女の鼻まもいはね及ものもの鼻すむ八倍なり

え鼻すゝりして泣るなり　愚考左鼻口涕
左眼曰涙いふまでもなきことなりまたを発して
歎く時まて涙目より出声をも呑て悲泣するは
涕鼻より出るなり則あなかむそなみだを治
むるなり
ふなれはなだすく敵れおろ所の
いわる恨の矢をはなつ事
一書に晋の豫譲が主君の仇をむくはむため
まさかしふすがたをかへて附ねらひし使なり
又を韓信またのまへ通る使者の木をくゞまに
其のひ居て鉄槌をかなしける使なりといふ
其考豫譲かことを戦国策史記などに趙襄子
か衣をとりて抜剣三躍而撃之曰可以下報
智伯矣遂伏剣自殺又韓信がくのゝかまでて

始皇をうかがひ奉る一人遠ひ奉る一人秦韓をかろんじて天下を一統す張良倉海君と謀りて重さ百二十斤の鉄椎をもて始皇を博浪沙のうちにあやまりて副車にあたると史記説苑等に出たり是てものゝ者ゝ刺客鉄椎さゝふる為れ沙決なり是ひとつの附会をいへて故事諺に口清和の水美濃も源を信濃に流るゝ任し三須宇庵を信濃に移す任すれば美濃と信濃の境三坂しの山形にて籠る所の人その以来孔山中に妖怪あり九尾猫猿の類にて神代より住なりて神通変化きわまり狐宇庵の妻白菊を客貌玉れめし妖怪山神ふためし合をして白日を変じて黄昏となり路上に旅鉢を敷く宇宇庵の一族家に一宿すときふ

夜中白菊をうかがひて見まゐて花しるる妻子れ中なり宇庵郎等を引後し山中に分入てりとむまとよ絶ふ探り得ぬ浦島の亲兄の為ふ三依道人といふ人あり是ふ浦島の吉凶を占ふ吉なりと云ふ此前供人をくらひ近習家物をこのみ玄関にうきすゝ烏帽子垂髪にて立出る次の家ふ美麗の婦人多くうけきて客殿ふ通るよりしに見すゝを女房の白菊なり宇庵思ひ入れ人のいの妖怪の所為なりとて名人のいの妖怪の士なり女房の敵ふ成れと日ふ名練の一束三箭きりしに引出りつゝ けさ刀ふ切てそ形なる彼士三郎の矢をたゝの家と口ふ文とめてそ体なり彼妖怪命数やそなり今日明ふ射落ふ射て死なり

それを此幸和支蟬全うして活ずるが如き物といひ又それを書りたるものと云の又次に白氏の詩の場を書りたるものは此不を範の杯なる鏡うしなれたるの書籠といふも白蛇は故なりと云く陸佃埤雅曰猿性躁性靜猴性躁至所林木振掉云云抱朴子曰猴一名胡孫云云

盜人の記念の松の吹をれたるの

一書に美濃国無坂の物見の松なりと云く愚考中仙道赤阪の西なり古松を拔て今の云く享保年中に拔たる也西のくしむ云く赤賜に製義す非賜の松なるべしいふ

忘ぼし　宗祇の名をつけし水

一書に みのの国郡上郡山田庄宮瀬川の邊

此泉を東世列宗祇法師に古今傳授年て此の不まてに和歌を詠をら年とて又此泉を白雲水とも云す宗祇を白雲翁といふ也なりと云く

忘れ　脫て云知るも忘れる

一書に ふる祇の白に世なるさに忘れの郡とりの礼

ちりしとてちりそそ人れ貴の物

烏城　そそひすの国れうらうる

あたまさの謎ものとけ一時を

一書に 貴の物といふをうまていやしく人の貴りをなるに烏城の甲なり龜の甲ハト笠に風ひて士に函をさるむ烏城の甲を胡国のうらくまとして占ふと云く

一書に曰く、神人の骨なりといふ。蓋し聞くこと久しく、今始めて見る。骨甲なり。又、古戰場なり。と見て、その説なり。その鳥獄の甲なりと。胡国の古しるしなるやと云へり。

一書に曰く、神武、皇子の時、海に流罪の人の海人なりしを、召して問ひたまふ。海人、答へて曰く、海人、名は海底の鳥、海人なり。

又、南蛮志に云ふ、此魚を鳥獄と号ふ。其形鳥を抜むいたるに似たり。

又、酉陽雜俎曰、昔秦王東方を略して、筭の袋を織り、為して魚と成す。故に其の形、筭袋のごとし。又、南蛮志に云ふ、此魚を鳥獄と号ふ。其形鳥を抜むいたるに似たり。

草木國不同俗云、又、酉陽雜俎曰、昔秦王東方を略して、筭の袋を織り、為して魚と成す。故に其の形、筭袋のごとし。又、南蛮志に云ふ、此魚を鳥獄と号ふ。其形鳥を抜むいたるに似たり。

彼流罪の人、海に出て遊ぶ。海辺に出て、海人の貴ぶ物と、心やすらかなるものなり。海人の貴ぶ物と、心やすらかなるものなり。

甲なり。事、我が身、流罪なり。

昔、秦王の筭袋、海人、名は海底の鳥、海人なり。鳴呼、のうらうらうらうらうらうら、海の底の鳥、海人なり。

[illegible]

杜鵑初鳴時先聞者首剔鬚長[illegible]
記曰杜鵑春至則鳴先聞者首剔鬚長[illegible]
[illegible]

杜水一升 [illegible] 後[illegible]
一云[illegible]曲[illegible]の[illegible]を[illegible]謎[illegible]字を答て
杜の夜の[illegible]を[illegible]水一升を漏刻を
[illegible]の[illegible] 一書に杜水を酒[illegible]
[illegible]いふ[illegible]スイ[illegible]杜を酒の[illegible]
[illegible]金気[illegible]西を酒[illegible]敬水[illegible]の酒
を書て酒の字れ[illegible]を[illegible]一升[illegible]
[illegible]酒[illegible]
[illegible]杜水を酒

[illegible]酒の[illegible]二[illegible]
及[illegible]や先任の[illegible]漏刻[illegible]事[illegible]
[illegible]刻漏制度黄帝[illegible]剣漏水制器以[illegible]
[illegible]天[illegible]帝[illegible]太[illegible]
[illegible]刻の[illegible]を[illegible]む

日東[illegible]月を[illegible]て
一書に酒[illegible]を[illegible]人を李白[illegible]
[illegible]盧仝と[illegible] 一書に
李白を丈山[illegible]石川丈山の[illegible]の名へ
[illegible]国[illegible]東[illegible]と[illegible]
成美曰素堂家集に石川丈山の詩仙堂を尋
[illegible]詩六言六句[illegible]先尋日東[illegible]対
中華仙[illegible]山鳥啼[illegible]松樹野客入[illegible]関
[illegible]無[illegible]泉石前翠微間

愚考に日東ハジツトウとよむ也唐書曰日本者古
の倭也之土京師一万四千里新羅の東南に当る
海中に在て東西五ヶ月の行南北三ヶ月の行
國に城郭なし木を聯て柵落とす草をもて屋
茨其俗女多く男少し文字なく浮図法を尊る
ふるの俗椎髻にして冠帯なし髪を後に
結ぶ倭の名を悪て号を日本と更む國日の
出る所に近しとして名とす　寒松曰先哲
叢譚に丈山初年嘗翟曇氏後介羅山
学惺窩門一従事斯文才尤長於詩朝
鮮権式称為日東李杜云々物徂徠亦曰
東方之詩杰也　愚考呉城又有乗寺号凹
凸窠石公偉偶之凹感其地名同而偉字捐偶
自号凹凸窠故日東の李白と称すと八作かしく

巾に木槿をさしはさむ　琵琶打

一書に服れ笠に山茶花とあり又巾に木
槿をいさゝか難からす服の山茶花を多
くもみて挟みするにて有るべし　さま〳〵ハ編笠の体
然のものなるべしと云て　一書に開元遺事曰汝陽王
進嘗戴砑帽打曲上自摘紅槿花置帽上遂滑久
而方安曲終花不墜嘆曰花奴　一書に琵琶打を
職人なりと云く　東坡が詩に汝陽真天人絹帽著
紅槿　愚考打を撃となり欧陽公帰田録云打字
當音滴從手丁丁亦撃物声撃手音戟　打也打也者
られ字義まきことなれば一きまなるべし　源平盛衰記に妙音
寿院大政大臣師長公西園一流琵琶の名人此業成ぬ
は琵琶一面をかき負て撥にて底弦を打なるべし
まつりと云ふ時なれば月見の席一職人が巾を

かつの木像をうつしていらせられしこそありかたき程
の心得まて懺悔をなさしめんとまてなされ
給ひけり
うしれ頼朝公寺の由来す
一善光大和の國の南閻浮提の今ありかたきこの
寺をうけのやわらかひいさゝかの寺なりと
まうす寺の今尊一光の御蔵を謝し奉る
我のおしるんとうしよや猶又なむ寺の事
など沙門いのちまてとらく　尊考かしく仰て
大きにあめてうきなて善光如来をあかめ
奉るにうかとる寺の傳の伴ひしか　諸徒のもの
閣さるといふ本尊を信あらたまのひとものの人
見奉りかかり大きく御堂を建て永く勤めとつめ
居なりたる　のち文永とき此くしぬかし

てあらひなりける寺のゆかにしらめるものゝかへし奉る
いよゝしまりた至まての説儀なと書せむとて
きこえの西の京にありし所にて天平の藥師の嘉に迦
葉如来當入涅槃法仏菩薩堙岩時結縁とて
見えける六月の二日此眼入給ひむと見てゝ
日ののちりて此御堂をたてまつりてあけられ
もとの本のまての所に移て遷宮の今まて此寺の跡
勤供まいらせきたまひて一座まいらせなりけるとかれ
まさしく山へとうつて寺ゐるのまことゝにて　永正十八月
二日の迦葉如來入滅の日あつまりて此諸衆と
いふもさいの寺仏へまゐりて群集の時はじめ
巾をいさゝき本像をおのれむらさし　えらにみ琵琶持
る膝に一人目立て琿丸の宮そうとく語て寂
人まて行のなりよりて一粥のして附きまのものゝ

このれをとききこの生まれて更に前世のくん
あるても尤てきはくの名残にはこの琵琶うち
ひとりをめられたのくもしき事のこゝろを
昔まわし隣て琵琶ゆを奪ひあたつて誠に亡霊
の為に弥まあらん関寺は前にあるもの蝉を
則見るりとあり一し

箕に餘れ魚といふきゝがき

一書に昔あるて世に一もたし生れあゆゝ事にまた
あるなに箕に餘の魚をといふてきを其つくて
賣あつく市人をも背さ世中にありさまを對
して隣るもれあると云　一書に室の八島は伊
勢にもうたしたり上古この道に鬼掘て人の子と以に
取りみたることありて子の代々に四十三といふ
魚を葉の火に焼て門に飾しよりなとの四十三を
くらふて人の子をえとらさりなりとなり鬼失て
後まその場よ餘をなへるとなり致よ下野の室
の八島まくらう煙かさゝの子れ代の徳を蒸くらむ
をまたまより東國まて徳形しを子れ代といふく
一書に上総房州の漁夫まても傍供にあてく
まあるる諸魚を施して布施とす又まて寺院堂舎の
供養れあるさゝまるなりまて魚つまに戒名あるを記して訪
施とすと云　くはまきまで八生の腹臓病のとやかて
おぞく失なる年忌あるその弟ひあるの一しと云て
同書に此餘をコノシロといふに訳あり室八島の堀
記に云むかし一人の翁みめよき娘をおち多くの盃
の身よりひとすらなあれとをも娘あそのさく辞しけ
申へ在身のとこのあ人を隠まきて死なすとていつわり
棺の中に餘をいれてをすつとしハあしらへりなりと云て

[illegible]考[illegible]に商人[illegible]牛の[illegible]
[illegible]故いふ[illegible]
[illegible]ひろ[illegible]ふ牛を玉篇ふ[illegible]
と河すると代をイケニ[illegible]
すまとといけるこの射[illegible]
なるこに鬼れるよ人贄の方[illegible]の一
我いの[illegible]れ星[illegible]むく
衆注皆曰[illegible]
人の神[illegible]
き[illegible]

一書に海[illegible]れ海上[illegible]の
[illegible]
[illegible]建処の木曜星[illegible]を[illegible]方[illegible]福をいの[illegible]
処の[illegible]て[illegible]命伝[illegible]後[illegible]を[illegible]
[illegible]と云く　[illegible]曰神[illegible]

いの[illegible]
[illegible]天[illegible]の[illegible]
を胚と[illegible]
次の[illegible]
[illegible]二[illegible]云[illegible]
姙の境を感[illegible]例和漢[illegible]
胎生[illegible]
[illegible]曰傳説[illegible]歳星[illegible]方[illegible]
[illegible]の星[illegible]
[illegible]

一書に漢の張敞[illegible]の眉を画てやわし故[illegible]
[illegible]
一書に姉[illegible]

姉八あるまじきの法乱れんやうにさむしといのり
よ姉をくいまし給ふ心うすくなりて眉
をくもりて涙をうかべ給ふ此二首義をあらはして
をのれ〳〵えをえて心高くよ高のまゝにうたふ
みて涙をながし　異考後一案院宣仁安
中姉妹三人同時列后位と本朝年鑑に見えたり
後ひく〳〵居湯よりかへりの花瓶
一書に云ふの山水を居ながら浸入て
うまくうる蓮花を後ひくのてすくひ取て
又一書に云ふ手まてをてすくひ取て
まゝ婦病人筆此脚湯
をすくひとりて居湯といふ　愚考云
海に及ぶ人間ふ非ず脚湯を形
ちまゝ人のすゑをきくよ
ちまゝ人の都の体と見て後ひく

とをいふ居湯を釜のまゝ堂に置て桶をり桶
の上に海藻をしてちりぬるとを
ちすをり実まを蓮花を取二首をまをまを
白をり取二首といふすして後ひくを〳〵を
俗語をり樽中に貯へ
すくまをたゝに花をえる一しをれた花を
一書に居湯の侍所を大塔の宮に旧跡を
てをををよなり
廊下をく蓮のうけつゝ
一書に湯屋にまれ廊下
つゝをを目出度揚をるをりと云
に続廊紫蓮架さまを　白氏文集
一〜愚案無住ものを不動の書をり新長〳〵の蓮の
花廊ををつゝる御をうと知一

杜甫の詩に「衣を振るひ
一書を杜子美の老大非傷未拂衣といふ句を
を含むの前書なりといへり　一書の前
書れぬく振衣千仞岡濯足万里流と思れ侍
る林津例の國しを強知り名跡古蹟を遍歴
して泉石をゝ訪ねてゝとゝ云　曲礼曰十年曰幼学
二十年曰弱冠三十年曰壯
えり雪れたいとゝしの袴を着て
一書に茶れ擬き泉石を尋ね煙霞に分入
月に雪に雅懷を述て生涯を楽むの意を手
しに形ゝと思ゝとゝれ牛乗のたゝめに足を繕ら
まして分ゝとゝその意を果さん官袴を殿堂を
切にしてさいゝの雪に袴着てゐるように見
恵しゝの余意限りなるに切字の子

法家まちゝに論して神仙の惑ひ少ゝ仮りに
も切字なきを数句なる数句なるに切字
なくて切字れ入れなきを押て切字をよむ
却て句れ意を損ふの有ゝとゝ云
大概その心を得られとも先序の学侍へる切字の
口傳をあらまし出ゝ云ふ
初心を助るなれと宗匠僻みてもやく伝授す
へゝと云ゝ　先数句混沌の間より太極の一気のう
ときく出ゝきを伝陽れ侍の分きされた数句に切
字を用ふ時物二つ分きたゝしめて地陽陽を
なる事なり切字を用ふる物に対して着別の義
なり切字といふ数句れ言ゝむの為に切
字を用ふ事句と為むを含むを求めゝ　下略
惟然　曰切字節ゝ行き是ある沙ふ侍れ

なるまゝハ切字なるのめ〳〵とう切字を入るゝ有り
然と切字を入さる有り義の秋風ふきもてゝ悲し
き業の林ちの白雲松倉嵐蘭の追悼北白ちう
亦當帰ちう俗そまゝハ塚のすみまゝ哭白雲出羽
の呂丸の旅中ふ死するを悼める白と白れ解ふ尚
帰ちを當ふ俗るへしの意ちして古園ちを俗ちむる
を待その身を俗ちむと松のひ法〳〵むふ俗そまゝ
塚ふまむとい白鈴ちまして俗るとすむとの況對
ちう去まゝふ切字を用ひさるを師弟を三世の義
孫なるまゝを去ちう切らさるを義の微意なり 下略
蕪村曰我門ふて切字と云いもに對字とい
と形ち 愚考嵐蘭呂丸の悼の白れまゝ金花
俗ふ此るをいひき又そまゝを口吉仏〳〵ちる法ち
しきに身ちう弟世ふの俗ちを見及ふふ

ちまゝをよきるとしかりふ孫ちを百人ふ九十九人ちう
都て法といふるを知らめ少ふ言勝の学ふ
なるゆくさそちる形れ大切の秘伝なるまゝとを
ちをえち行ちをや一〇作切字ふ云切る
るまそ俗ちに キレ字まて切字ふ云の之
芸材の形字ふいふまふ切字ふ云ふ法を
知て去きを大なるまゝハ俗ちを去あちをちに
し添切大切なるふいふ初まて去ちを一〇婚姻祝義
のなるを必切字を入一〇セツ字ちなるれを陰陽ち
分ちに彼と兄とを合をて夫婦合侍のなるれ
ハ一本ふ立まて去俗ちを夫婦聲調不と
きるのなきふ切字ちを入ちねを形ちをとい
を師弟なを三世の孫なるまゝハ切字を入為の義
れ微意なりとをなのまりふ法ちなるのをこひ事

なり夫婦又は切字を入るまじきとしていとなすこと
のなをすやいうなる初心の学者なる毎を
野し誠しれもの一りに同書又曰連歌本式
俳諧は切字を格字なりとなるまじ切字れなる
を去るる一りに切字を変名れ格なるまじ俗なる
一し毎の常言は格をもちの一し格中は去るは
狂し格和はまた新なる法和なり格を抜て格
和は新なる一し　愚考此論をいて心抜て去は
りなて格とりなる切字格字れ格とを大違ひし
格字としりは後今は格日格番格なるの数まて
去りなるを去やうはけて此字を格字とは違を
なる格和格和の義を数名俗名はようなに
一定しのをきくのなるは必定と混
す意なるに

霜は　まさ　まる　葬れ　食

一書は今日を勤としていとなすまさの字感はしと
注なる人者まさまて書は法書法等水
の俳林良材は又えるとなる文字まて書なるとを
一書は世蒙の抜めしと義はのこまるをなるまま
はえゆるなる心新新の食とを仕抜れいとなる
き方を新孫を新孫なるにして葬の咲をえるなる
食喰はと形なる一し　愚考新孫なるにし
て新新を見なるる食をはまて自意を抜ま
しは成て毎なると脱とはなるまなる心泊る番
の士なるれ物なるる神書のなるしなるを見て
なて番一這入て新食の脱は向はは小庭の新
毎の書を常て為のまこはけ咲はさけるを見
て世れあるを方を引なる庵て前書なる

かなるに此余膳をさいかしとなるべきこと
世菊まてをるる蝶れ羽をまて
一書に曰すまとしていく初をれさえい書林をもて
第三とすとこそ又一書に霜に紅かとしいに
より書林の作を附るこの愚考まくしいに
よて林事を附るこの事の紅かをの書林を附
このしいてを祖義れ流れをのに作りを
まを添きより不あわ古語曰槿花發飯臺秋爽
入文門こりより不あるを愚昧れにさきしまりけて
を作りのやうに云崩すを頗に念れるに彭の
附別事彩

麻呂の月袖に羯鼓を彩すむ

一書に仲麿を美亀二年入唐年二十六天宝
十二年皇朝一帰らむとして明州の津に出て天
の系りさけの和歌を詠し又王維の送別の詩
なりその此れ待人餞して羯鼓るるするむ
と成し

桃花を愛でる貞徳れ家

一書に月を常住不変のまれを又春をうを
を附るう　一書に磨といくはる貞徳を附るう
彼長既九と号して隠者彩るう家をまて落
和に五園の別荘なり梅園桃園芳菊園柳園
芦の花園此るを桃園のあるひるむ
一書に桃花をを彩るうして梅とを桃とを勢
うるを桃を神仙れ生既をるものまして
三千代茅をまをいしめまをのこに貞徳の
寿をるるのわさに作るるるるつし此義を寿
八十余歳を移りとるさまに書といの慶雅

といひ然れ就うとし　故なりとおもふ
爲壽命注にもくのめぐく云並てある出たらしく
見ゆるところあるさましきるにてさらしむし貴一
月まで不變なるまじきとぞ湯ゆのゆふさいひなし実
てきて桃花といひ貞徳といひまつくね形ちハ
し又桃園として五園を定むるとまでなくる
浅けの注なり麿に貞徳の見込に漸ハされと
さまらずげやなきさ鶏皷乃やわ示さ何ともいひ全体
物れ注えてきむに先ぎれ日の俳諧を解せぬ
ものの日よりつるき而に唯て解す（まことを違
ひくきに示よりうを生して示き　さうすまゆへに
ら小らそ升云並ハ然やうなる識ひしくぞれ日を
ぞの貝の流り喜の日躁養時代をとよくき見込て
解すへし　又ぞの俳諧の器量ハしるまらんうく

さて此桃花を鶏皷に附したるものなり円機
活法曰明皇弄羯皷桃杏皆發又酉陽雑俎
曰羯皷之音指大簇之一韻也　されどこの時の
一韻と云桃杏皆發と云迚も達ましめ添るまで
も桃花をもて季うつりしをもてありのものなり
鶏皷録曰撃以両杖又通典曰正如漆桶両頭
倶撃以出羯中号羯皷全体両杖皷と云

両ふゆり鐵香れ国蝶へ見うゑて
一書に然といふより游ぶれ沼の国ありしを取ませ
て應前の泉水へなるとふ出る出て宮むとなり
河原院の子が祝れ塩竈をうつしまひ又井出の
蛙を放ち又を宇治の蛍をとりよするれ数乃
書を引云て国ものしを俳諧のをかしみなり
興のきさらか花を只法に如く

一書に曰く、この月に空を望みてひとり言して人情ふうたしみちのたくの事有りひ出て呉給ふなくとなり　一書に曰く、[illegible]を面て世をわたる人を指まり法なきさまなれのさまなるけくさなるむりしを今れ縁入のやうれ服をなくて寒き夜を去のく料なる嵯一寺の布の子なりとう縁ハ考法公の時代より伝り昭て二百年まを呉らさるものなり奥儀抄に曰正月をれとなるなりしを此月さえうりて衣を更ふまるうまてきさうきとりみとなく　愚考曰りを[illegible]きに思うて法とをく事しうらめ鏡なり潜夫と雪て翼のきさうきを法人を実方紀氏の小の方なくの侍と実方紀氏を年奥列れ任に[illegible]のひなうう五月あ屋めをとうさり

そまを[illegible]ひのよに此地に[illegible]とや紀氏の伝に浅き文の法の花の法みと[illegible]のを苅取て菅一とをく菱糸系圖に日長保元年正月廿六日卒す又世法なれ[illegible]曰実方中将の墓を陸奥にてを一ふるむと伝一学伝うし誠や差人改に成あるをて陸奥ちに成てこのをまをひし[illegible]此世にをて[illegible]を上の臺盤すへうをを八雀[illegible]ちて[illegible]ハ[illegible]実方中将れれのこうりやとやを減に伝うハ[illegible]れむとを実方れ事跡枝素捜　拾記故事談に[illegible]の花の法みを心底[illegible]略す彼潜夫の潜香の図りて法香と空て法をを人を[illegible]伝うをを[illegible]正月れ卒去を此月と伝り

これを雑する人もあらむか桃花ハ三月の季なれバ
田舎にてハ二月三月に通ふむつきといふに附たる季
なるこきなり弥生ハ季をとらずなり故に如月と
従ふも附る法なり近年季吟季庚季讃
に崩れたる附なとふみしるあらざるハ惜むべり心
得すむるべの一つとの大事なり

床ふけてくるれむいとこなる男

一書に奥州ハ如月を泣といふより陸奥産の奴婢
をよん出して田舎客の初なれかしく床ふけ於
まて語り合なとに同郷にて殊に従弟なりと
打明くるへきことにて次のるる従弟同士といふ
より初き附言号れ中なりしを女れうこまる人は
このいさまじしら哉ハ歎哀になりて責られ
しゆへ孫のあるまじけとまでなりるよと恨れ

のこゝしなり

一書にありのまゝ記して田舎ハ常
なりて傾城売女と成侍るも甚見るなるべし
て今従弟の末と出てよりり忽面をも赤らめい
まく聴て害の色かまに松山れ波かけて
来れ絡来んなと説く浮て果ても宿の書などは
あく誓言しちぎり侍るにいひても無きる
さめはてその庭に打越けて孫のまるにけと
なるのそのよと恨のこゝしとの従兄なり下　孫考
そのいふ言号なるも程事に丈婦となる一し
又次の注に雪に緒来るも巻のまじとよ従弟なれハ
田舎まれ懐気なて無すきめくりとありて勝手
の注歎なりといふ雪よりかく絡来して女房
なるなむとちぎりしは床ふけ致す打とけ
てそのもとへかりてかねてまじハ従弟なりけれども

今まて心をつくしてこれを二人とも不限今さら
なり是必同姓の親数なれとも成へし　礼記曰取妻
不娶同姓故買妾不知其姓則卜　云々賣女の
なるなるへうしとなり治来なく志法まとなるよく
し紀してなまと同姓の法度なりと雖
みなる陰謀洪恥与禽獸同也又論語曰君娶
人倫陰謀洪恥謂之呉孟子君而知礼孰不知
於呉為同姓
礼云々是法不妨なる限なりて世気なるなら
口をしと癪をたらきたりたるき
明日を敵　不首れそわをむ
小三太　小盃とをひとりをひ
庇経時日結納を海て吉日なりて格りて
なとの癪をなる出さまて深夜の妨となるな
よやうなちきりてなる取ときうそのちりなき
しとなる次を童塚防戦の術をはきまて明日
を敵の方へ首をれそくむと見時を格めなり
出の癪をそ恥なれと名を惜む雪将対侍之
次を名残の酒宴あるて小性の小三太盃
をとらをて大将の自ら一さし舞うて成一
月をれそうの事　牡丹ぬすん人
衆注この酒宴のなきまて名花の牡丹を
ぬすんとの盗人月れそ
なまと心をとりて庭前をぬきなのそなる
そきれりて
牡丹のぬしれ心の程流を双紙の地よりいな
らしなる陰なる
ちつしとれ丹地義　切町

物花の世とや嫁のいこのめしく
古つしを元こるり樂天の詩より所謂劉
院葉終朝醉元こを遺俗語を用ふ迎
以を意れちりひも粗を元を俗の狂歌曰俗
終平話とれみ見るハ涉事きこ俗終
平話ををめさむこうるめるとこれり
しをくうこうさる形るゆへ石地蓋より結
ひ込こりさて初花の白より亦て世こてや
嫁のと書り本宵てをの注より曰初花の世と
を迎きひいうはきこるかりて上日ゆり
の衣裳れ花やの形りをへり
ふてとこ云く　是考嫁のいう考きこ云るハ
をりるめを云くさ形りヨメリれいうめしくるり
地蓋切所といふ所るゆりいうけるき婚礼

を附出をりを云考より云れ嫁入
れ行粧をいうめしくとを初めるるのるり此
注者をもてを蓋用てを見こをこうを為や
ふすきをいうめしくとるを籠て又不畏くを
書るり蓋よるり不れ附より細より　蓋云曰此
附蕉家一大るれ附て初見のめやすこのう
曰形るり蓋を新想の附といふ地蓋切といふ
を沈然こして新すこを為の中より大きを小児
の墓をるを一ゆ蓋を新しこと世れう一第一れ
くるる新みゆ新し為是を形しるるを第ふ新
ありいうめしく花をこのをう嫁入をるれや
なりきのるるの中より立て左をを云りみく
らくて云考迅速を新を悲しるるり
墓さめしのさて　七十

一書曰前白水碁を意日といふ老人と附会する義なきに付き記憶なきしかるのみ
なれども高きこころなりと云く
遥考七十と切なる礼記曰太夫七十而致
事若不得謝則必賜几杖又杜待云人生七
十古来稀と云く狭衣に致仕の大納言なり
それを衆注に云とよりて老人を附会すと
きこいの文盲の見といひぬべし是より以下
別に決する

意をめきめく除海をまつり

林蟬のこゑに聲きく静さハ

一書曰面白き附会れとこゑに声きく不除海
又系得きねと学えめ声しや　一書に髪れ赤
かれるといふより除海師の母と云ふ

附会する一一漢土の形なりひまてを思ひ
夫やうを待まつ　袈裟を織搭衣を清らに
して待事なり除海の母を至て思ひ深く
述て眼を泣はらすと云く決れるハ除師
のうつて大悟の意なを云流しうるを生
なる蟬の声より虚に中華れ人物を附老女
一書曰唐梅といふて意を砧とよりて墓面白し婆子焼
といふて意を砧と云ふ
庵之話則老女祥邪に帰して除海の偽を養
ひ置てその偽の悟道をもうみむるをめに
小女をして偽に意墓の体を教ゆ即人今一同
曰正當恁麼時如何僧答曰枯木倚寒巖三
冬無暖気莫問婆子曰徒二十年来俗漢を養
ふてうこ偽を追帯ひ庵を焼うるられ老婆たや

附くらむ　風谷とゝみ曰黄檗禪師得道
後忽思省侍父母師往到圃中一婆子出問何處
来師云江西婆云我家亦有一子在江西多年
不帰師恩借宿婆親為洗足運足心一誌甚大
婆失記是其子次日運辞去於三里外説与郷
人云吾母不識山僧但母子一見足矣郷人報
知其母趕至福清渡運已發船一跌而終
愚老如人云焼庵の話なるに養ひ置て子の偽
形らんと待ふ及て恋をあまして我子ふ
美をむとのきゝなりの次ふ禪れらふ形の
聲をきゝとりて意味の深きに訳をきゝ光明
藏小曰豚海を達磨の骨髄なり又曰豚海れ一
喝を烏啄豆毒のゆしに人を殺して又活す亟
しなし葉をもて書へりなを口をもてゝ亟うに

豚海を地ふ因て名を得しう唐咸通八年四月十
一日逝す次の句を一書ふ曰秋蟬殻の実二百一意く
前句静さいといひれて
ちうく仏の一き形り故ふ
ふ交ちを雲水の雅客ちうと云く
ひとりを典侍れ屠の内侍の
一書ふ山花ふ現をひらくとゝいふわ小原浄寿れ
休ふ見ん一ゝ一平家物語ふ文治元年五月朔日
長興寺阿證上人御戒の師ふて女院并典侍局
阿波内侍法持ちして同年九月れ未小原ふ山
居文治二年四月廿一日後白河の法皇小原御幸万
里小路中納言殿ハ執華ふて御製洗水ふ行の
楊ちわしきて浪の花を盛形ちを余情ハ
女院典侍の局山路小出て撥法み草れを形ちと

て一て山を千里さきをみんとさしれることゝ御覧
して一人を女院よりてまいりすひとりを局ら
内侍のとゝ又内侍を侍局を典侍局内
侍局命婦局を格子局此内局れ内二人れ
局を女院より賜りしそ尼より賜りしその御るり
見たを一書に内裏上臈の旅形らむとゝ
先注をりて無侍ふたそむれ偏執るり
三ヶ北花鬱時屋ものれ多いくさ
一書ふ数多れ女房並居る侍るまハ家ふ内裡
の窮人をたりひよりもの紀事曰禁裏清涼殿
南階前有圖籍其雜法家中雲客被出之仙
納弥市就此事決勝負一書ふ三日ものハるく
三ヶの律北義ものる一しとゝ云くれりゝふ漢土ものを
圖籍のるり玉 燭宝典ふ曰寒食の節城

市多為圖雜戲又玄宗皇帝民間清明圖雜
戲を樂むとゝ為ものまとやはり三日のるるる一し
ものみいさむ越れ獨活苅
一書ふ家ものを裏一國しの産物を貢する
伴こ越ものを貢ものの贄供るる一し揚白ハ祝
云ものして歴代のものをものみいさむとものを白
皮の翁ものを貢き奇るるる一しと云こ
一説ふ越の獨活苅ものを越後の弥彦の神事ふ
て伊夜日古の神ものを独活をきらひものよりて
弥彦山ものをうとものを生きたとゝ平伊夜彦山の
神皮ふ應對して此るものを尋ふさふそのを云
伴一ものを伴ものとゝ 是評城ものを貢ものの熟語
るりとものを逢ものをけりひりとものを
出物るり越後一ものの道のかと吹浦漬汐満辺

山林の中に二つの小社あり往古を大社に
して一を白髮明神を一を獨活荊明神と
称す根元白髮明神は獨活荊明神に
そなへの境地をこうして強奪すと云り但云に
りて上古此二神惡仲なりく白髮怒はなく
やすきとて神軍ありて海陸穩なりく作
毛悉失すきとの白髮の社者に獨活を踏
ふ人獨活荊の神うとを荊て白髮に獻し
謝しまつる人白髮よりこひいさみ急をつまり為
まして軍和平に成り是は陸奥きとそ
此例を作して三月三日を五日とし中古にて
大礼行る遠者のの花を摘ひの持衣未を長
し數百人各酒を携へ一斤を獨活に捧列
をなし次く廣前に進み洛まるのう宴を

市を為國雜戲又玄宗皇帝民間清明國雜
戲を樂むとなりましくやはり三日のなるる一
きらこのみいさうむ越州獨活荊
一書に宮まるを夢裏一國しの産物を貢する
作こ越を貢ものの數得る一揚白ハ祝
云りて聖代のさて方をこのみいさんとを白
皮の翁を照して貢を貢き者るる一しと云
一説に越の獨活荊を越後の弥彦の神事に
て伊夜日古の神を獨活をきらひのまりて
弥彦山をそうとを生きとして平伊夜彦山の
神皮に應對して此るを尋ふさらにその云
作一を作るとを違をうけ
るりとを違をうけ
出雲より越後一ゆ道のかと吹浦漢江海辺

学全日

山林の中に二つの小社ありと往古より大社に
して一ツ白髮明神と一ツ独活荊明神と
称す根元白髮明神地主の神にて独活荊
ゝゝの境地をこうりて祭礼すとあり俚言に
いへる上古此二神墓伴ありく白髮怒髮よく
やくすすきとく神軍ありて海陸穩ゝに仕
毛悉失すあるゆへ白髮の社者に独活を献
ゆへとく独活荊の神うとを荊て白髮に献し
献しゆへとく白髮ゆへいさみ怒髮つゆ
まひて軍和平ゆるゆ是ゆ陸奥ゆきとそ
此例を傳て三月三日を毎日とし中古より
大礼行ゝ者ゝ者ゝの者ゝ嫌ひの献表来を長
し数百人合語を撰列
をゆ廣新ゆ進み洛ゆそのうゆを

移さ迷つきを月とゝ字をへて天ゝの姿と
ゝゝをもゝ移ゝ迷れ陰空ゝこのやゝうゝみゝしゝくれ
ゆひゝけるきゝゆゝ仮令ありてゝ十度ゆ
一度ゆり夫霰れ本情といゝゝ劉向五行傳曰陰盛
雨雪凝而陰寒陽気落不相入則散而為霰ゝき
ゝて凝ひをゝゝ一次ゆひゝの徒授をみよ
五弦仙のゝゝゝ風雪霧炭賣霜月ゝゝ
追加の巻に霰の名ゝ古書ゆ住釈をゝむと
れゝゆゝゆゝ俗諺の集をゝゝむとれ
ゝゆれ又ゝ一ひゝれ物ゝゝをゝむゝ六月の
中ゝゝゝゝ二月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ出
されゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ別ゝ一既ゆ塵蘭
集ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ紙字ゝて書ゝれ日
月解ゝの白木槌ゝゝゝゝゝ霰ゝゝゝ文字を

あるべきものを云々注同じ此癖桑なり又冬日
注解するものを云々と書するを罪名を記し
霜秋の字を注釈あるべきものを古書の文字を私
の書改るるを面白當光の説
さいかち　ふみはゆく　水のいなづま
一書に此服歩行して尉の意なり天地変化月稲
はなみはゆく氷のひきに彼き出めを水のいな
妻とを作るるを一書に月新のうたるけ
しきをいなづまに比喩して本なれ余意をの
けるる服なりといふて非なり　恵考准南子曰
日月天使也積陰之寒気久者為氷水気之精者為
月云々とかれ先注のあし
歯朱の桑を初物くの夫に員て
一書に岩又乗移りて時の場なるを大夫に

変化して安光親想此おをさらりと放下し
て狩人とを附るるり市人の初商を祝ふ
意りて猟師の初狩をきとふきて歯朱
此桑胡服に歩行のけて一とをの門出を祝ふ
姿面白のさとと云
北の御門をにしあけの事
一書に変に初春の貢とを附天
例をそ服赤此変るるの数なるべし北を指法
にて卑賤の者の通用すべき門なるべし
蒙を立白前白此狩人を猟師とを見に古実を
正して武皮公事の狩人を勤めるを見亜
してさてはを御門をにの事此書に八附
をるるり二白の向に貢する意味さらに
なり北の御門を通用の出入口なり南門を

紫震殿の前にて涛紀式をらして見用の民此
白窒て禁裏涛所と目を付るなり
馬糞　一書に門前の一くなるきに糞を掃除の姿なり地紙形
に竹木をなみてうきにすきにする事是の折のすみ
むさるなりと云
菜湯　去年むしの辺の蒲公英
一書に掃除すると云より美麗すきを
見出して菜湯者と降るそまに云こと数
不淳にそみてそとをしむ情こ　愚考豈為
むをくまきらに去年れくきるるきけ中まる
蒲公英と定めるるあ
殊に蒲公英と書沢の北学蒲公英とらに人の
う忘をめて雲をしまるまにその人の名をもて降るこ

らうをけにめむ姫うにきて
燈篭　をけにるさけをうを
はけ萩の角からうを撰をまに
一書に菜湯所にうにく姫のにむとあまこ
利休の姫の徒をまあくむらうけに三義
あり当気にまいそいこそ音良猫ちまを男
まさうに又鶏丈是ハ交鶏を四とにるるを
鶏丈をくむこの　愚考鶏丈を手れけ多数
るるものにむ姫をく当気なり　一書に菜湯
の菜人儒者の姫をを誘ひてお辺を道遥
すの作を降ふらうにけをうにくこのし
と雅綺にくを堪めとにくさるのらうを当なり
その心を当すに菜をれて家をめにみに
をうみしむなの一し涛式にをけに成をい

しとなのたまへれとあるかうのよといひてこのかうの
ばくさを傳の字なりこれ此うの義なる一又
源氏より四石の入るのこの一ばきまへしなりそれ八竜
すりるのこ竜を竜とする義も一理なりそれ非をぬむ
而よ此よ一一附の意をものよみよ此く別つみ学
まし蛭を蛭くさあてし蛭遊のたしきのえのこと
誘連て此所学ぶそなるの　愚考
此注者自ふてふもてさしく言ふして陰ふ所を
引入られ癖ありて文者をのさうかうえられ
此らうまけて若しもしふるうの学義なりこのれ
よむ蛭をさうひばまして蛭遊と名ばるの
そ物よむ蛭ものく蛭ものよ蛭蛭遊一生ふる
よその面白きとこまとうしふ京の省う又傳の
家義をあふしく作附の字こ傳ハかよう上を

のばくこ作附を上ようかを一ばを者ふ
るうまれよむ蛭をいまさ十二の十二三形ふ一しそまう
ばばこのハしく叙の前をさばものよみ者ふさ
まるう蛭遊二ふる蛭ふを蛭やふ書やふ
まこのをまるものを見て伝よばくとひよ義を合点
このまのふ一　一書ふそこうそむとふ形ふれそく女の
いばまよそ弱木の鄭まて思ふ一よ代
まそ弱木の鄭まて思ふ一よ女れひ蛭竜を捉しと
ふう敬林良林よ見神ふ大和のこのばふてるこの伴
ふ物ふむこの　一書よふふふしひよふものれふよ
さ竜を陸竜の種椒よるるふふて竜ふてみそこの男れすと
一人ふれれれふる伴ふて蛭竜ふふふそ男の
ふこまふふそのふ一よ蛭竜を生ふすとふ
ふの注者いばふもし先注をえやふむと

さまあしまいの思ひまつりうらうらてそまと　一書に
情をあらはすといふよりも雷と萩の上に見立ていつ
まさをこのよハきものるのまと雷の腸をゆへに
萩のはをきぬをやの萩のうのゆへ
に腸をいかさめやや後結遣に萩をあらく
まとすまをそ　又一書に情をあらはすといふよ紀
うめ　又一書に腸をいかさめやと思ひ迫に紀
その男より妬き思ひのかとそ擲たまふとす
よひの腸負ふ女せて曲芸をそされうの義
萩のそとけるきさをそ見一に時云云
義のはそれすして腸と萩とのあよしと
うは腸をこのすうに踊子の姿をゆるされ
めるるやうるうるうに見立を妬遣れ女をるに
愚考案まてそ鶏丈をかるひらの腸と見

ゑるゑ大和物語に曰昔津の国に釈子てすむ女の
子芝に蒸墓の男二人ありの男とをれ新このさち
きろさしれあつきこ車又物をれこを歌をと
に腸をいとそまと宮うねとり形しゆへおい
ふやうまとりれとり形しゆへおい
腸をいとそまと宮うねて手月をれをうされて狩
見をそ見ねて生田川の面に浮て行る水をを対させて
あてそ心男に男のの子一しと形りをうに一人
をの所を射ひとりをるを庭に形るを女をむをるく
一をの歌を詠して川に流して見す二人れ男
腸をいて川に流入一人を見をとを一人をを
とをとて三人とをふむをくるるぬ心を京
所の別當詠歌して方腸にけをるてやを
をむ若に腸にけりをるのふをを紙とをの
侍に宵ぬ一しこの姫のうしをくを釈のさをこ

雅楽寮にて二人の男の伏合り勝負れ
歌を角力にて連歌の題に應ずることなりけり
連歌の式目に曰物名歌故事古歌取
なすべて二句に付ひろきとえて前の二句
を伺し次の一句をこの三句に
付て付るなれば
幸三句の難なるむとおりに
古法にて今をその沙法なるその歌いむとい
に後嵯峨院の御時前句に七文字に
してあやまれしきしいに付に帝かしらくに
の日ひけるこまとえるとなるこの難句にて
付て後鳥羽院に問給しに遠孔に及に帝曰まの句
西にのふ一きのより勅宣あるに民部卿入道の
云そまに極民をるいきれうやをるに民に

伺の条さるるやはあきとやさられるを融覚の云
上を付はいとなるをきてこれを付まて付るる句
をるまやまに歌む二村の山く付るまるれも
歌感頻なるり蒲元感類す是を本歌宜波三句
をるとえく本歌を後撰集に清原諸実に
をなやふ意くなりしこれ二村山まはいえるり
まきに故に八雲御抄に曰一首に歌をさ三句に割
て付るる例のなまれもの語三句を句論のるこ
とえくまえまの付りるるれ付に付むす
に難意をるいに角力にを撰をまれとして
を兼句の連歌まして付るゆるさし前二句をえ八
荒原血沼の付まを宮るるし故に人をの世の
歌を付をきていに人その付にうるひるるむ
とえをまに人をの句又をの人をの人山の途句を

みちさだめして土のうきゝをハ附し其の土のうちにて
江州甲賀郡ふらふ山に結くさゝ　夢窓国師曰傳ふ
牡丹籠ふくつの白狐は翁の感し給ひの志をなり
よりつくさる所の事らりやと問まふ杜國云和とき
かうこれ猿よりれのひよせしとこ翁隣に狭娘
よくいし今心がけくりと襲羽なりしとくり此附を
津國ちあ猿りしの嫉をうてりの男をうひて遊
ぶらまでひさ古ちをとりる資をれるきこなう
この平氏の武士猿りしの嫉の幽霊婦蝶蝶髭
をを擬へ並ひし猿の瀧をを鈴古歌のもしろも
むすひ合をて一るれよりふまとめくら使皆れ
をくてるきこ蓑ふ翁のかめあひしふうむへたる道路
作時猿の名よ古られま對して有れをまてをその
帝の四十二のまのなくをひの角力より取出し

ちころをはなれ有れ古るうふ合体して附くるなり
さうきこハ附さのふ古るうひとつはららぬきさ白
れ表ふうくる古るう二ツ利休の猿ともまで
ツの古るうちるうまでの三有れうちふこのく心を
さめくる法くきさ寒ふれ形らぬ手後とひふ
へし

蕎麦さく　青し　滋賀楽の城
紀月夜双六表は藤原して

愚考紫香楽の坊聖武帝行基に勅進を
して大佛をはくらしめたまふ東大寺の大佛
を即是を移しまるなり故に城とハふ又紀月
夜とハふなりを和歌云芸誹ま夕月夜に對
すること知るなき人もいへとも定りなきゝるく
と云ゝ　愚考ハ後の説にいふらし　万葉集第一説

後京極摂政宮時頼略して云佐保川ふ
いゆきいとうて我袖さゆる夜の上弦月夜
云こ何そ我翁ふ慮恩なるらむや
出家ふ入れ業とて離を法名を唱る
人妻婦の君より家ふ入れ来ることを思ふ人を見ぬやこ
一書ふ離を法名を唱ることを思ふ人を見ぬやこ
とるき法名を唱ることを聞こうと云こ　一書ふ
ま来ることを法名を越と聞こうと云こ
出家二句をやこことをきく人の意ふて面白ことを
いふめるを見来なきるを思ふといふを
意君といふて恋と心得こるなるさ
ゆこのきまて波の水ふ影通ゆき
一書ふ来の水ふうれを波のなしとの人義
なるこ勝しさるまう　一書ふ裏まう

愚考　雛を法名
のはすふひ米と執筆こう
といひ命婦より米を紙すといひ只人ふ
なるふ法名を法名を法名て大伴皇子の俤とこう
十寸鏡ふ曰大伴皇子事あて雑波の津ふ
思ひまて中略その波言波とふの吹入てのの
浦ふこ荒ふれ供れ人ふ不とり来
なく成ひ云こ新ふ云言湖を津波ふ又
洪波形十寸鏡ふゆ法名て略す命婦を宮女
れ内五位以上を帯を内命婦こ云こ
佛喰ふ　魚解き　ふ
一書ふ讃岐國佐の浦ふ鮫の大
魚あるふ思心俤新の佐の俤像
を脇中ふ元出こ
一書ふ讃別志度の浦　長田の佐平恵空上人

のすめまして一心念佛に行ぜんとなり或時
志度の浦津波にまして流れ来る鉦の
殿より志心に此流の弥陀佛を拾ひ得ると云
る物なりとなくとなきなるなり

縣なる花見次郎と作られて
一書に花見次郎といふて日向国に行る次郎
とこれいふる者なるべしこの近国に海
法をなしたるの者なりして名を名乗
まてくるなりその後名をいまて花見次郎
と此名をなり後に田舎に去いとい
事なり　一書に次の畠六郎を殺の出来
の地方多く拾ふる者なりまて別に細有
器嘗や矢刻の指の出きぶ
庄屋に此物を送りぬ

一書に乎句のこの孔雀丸を短刀にまして
と一定に一分なりに孔雀丸の弘
とを若別なる一書きの　一書に器嘗に指
八枝素第一の出指にして長さ二百八間矢仮
の里を日本武尊東征の時矢を仮て来り
まして形の名に呼来わしなり　愚考平
分に出分短刀に孔雀丸一ケ所を今なりし
とを祖心の迷ひ者なり器嘗やを名所のやし
ゆへにまぶとを為なること又曰義分を義ぶに出きに
を心別なるゆへにまぶなるに孔雀
のなるを決してなるなるなるなるなるなる
に義分と揚なるに武器を出なりたこの武器
なるを注を厚上をを
一ッを本にするの注に矢あるを矢止なるの

也よりその小葉を費しぬ同じ面の見渡しをとゝ法として文字を改るよ增て況や両頭ふれいてたるや家よ

詩 商人年を人奚ふ酒 價弐 其角

久く湖 日 暮て 駕 こる 鯉 翁

さの数多と服をこ白ひと揚句よ

詩 商人花を貪ふ酒 價この那 其角

春 湖 日 暮 て 駕 興 吟 翁

きゝまを首尾連環の韻とし別の象向を

すとめをる也よ同意の格式多り数立巻一自注

揚句此条ト丶書しあり 一書よ矢刹の里

在屋の庭茅ふ大きなる松有て世よ多るし往

来の旅人求めて見物しそのこの享保年中の

焼失よるくるし

詩歌連俳の風雅をいとれるとあ下

梅子を柴荆長よのひつゝむ

晩日をゝくゝ力 賣 年

一書よ老松の壽よよせて歌よみそをを不

圖吾子のをれを松の出るを方多り表の

ふしれうゝ余義ふ捨てしよ今を

宝て成出して柴荆なの業ものあるむとこ

いをのをゝ不ゝ

歌の意より世ひ出ゝむ又小所ものゝうふ

松をこしを都よ知ひとゝ塵この方のをきれう

らの松を意ゝ此歌を添て小所を捨てとと

あり吉のをゝえ松の一字をの解よ使ひ多り奚

のをを浪人の奚よ流うをて室代の力を賣

て年の用意ををむとあり

[illegible]は狂吳の國の[illegible]めつらし[illegible]

一書に一時して名利を棄て世を
風流の道人と遊ぶ心より古人の詩をもれ
ものしるしむ惠宗は詩に金重吳天雪晉輕
楚地花　一書に東坡の伴まして[illegible]
あしらの賓客と為し吳國の詩狂人雪の
無に寄て訪ふを秘義の刀を酒に代て餐
應す信友の交わるを侍に黄金不多交不深
とさしまきえこの朋友に信なき人の淺情を
誡めるに吳國の笠とる麗笠朝鮮笠
東坡笠の數多し　魚考先注の刀を賣さ
るの人の詩をれりひ出しるとき非ず向ひ附て
風狂人は来まるこ後の注の賓客も又非ず
朋友に信なきとして秘義の刀を酒に代ふ

お遠ざかる一し彼刀を賣て手用意するおろかなる
東坡笠をむ守りて風狂人の来るをまつらしく
よろこびてもてなさ方なりこの云友を方より来
ふ又多のしらしやの語に蒔合して一座風流
よ又世なるり此刀賣年北年とい字をいつく
又てうるか実言をハいよそ

襟　1　ゝる　尾　この　斤袖をとく

あらしハ〻指に指に呑かさむ
一書に彼雪見れ狂人に言尾の斤袖を
切て襟巻になるこ[illegible]る俗に無あ大しむとく
全意〻の仇ならるる次の白を則揚屋の
侍にて賓に劉伯倫の詩の意なるとて書人
さ〻劉伯倫性嗜酒嘗携一壺酒使人荷鋪
謂曰死使埋我

芥子園一室に会を催す
無味堂白色隆に懲りて
一休禄師のいまさ成道なるを禅法に悟して
よりて芥子園一室に会を催して本尊の面目分
立すること一目瞭然たるべしと
みるべし

三日月の東をくくくくと撞の声
秋湖のすうに琴のつまもれ

一書に一室の芥子園の景なる黄昏時分
三日月に蕎の宋なるを肖次の名西
山に三日月をなるのめ東に晩撞を伴て
湖上の泛舟を惜みて琴弾すくくなる
なむ　一書に芥子の一室に入相を法行を
常の心なるなむ次の名三井寺くくなるて

秋夜湖水に月のてみしの徐来水波不
興飄々乎め遺世とそるるに赤壁の琴
をくくれりの半ばに出るきひのあるひな　琴
やるるくくむとしを　きりに至て忽借をして
その琴をこのちきうそやてひくくとすくき所
なるまとくく千眼一流の場をまはるまて一
端なるに興に乗して借くくれくくと借もて来る
吹きてや興尽くくれくくひてその侵くくすといふ
例のものの如く向上の毎度にて尋ねの人
のれのひとくくなるなるる　　西考一名の少
やう甚に遠きに三月に接の声に西にて東
の方をくくくくといふくくなるるに次の名に三井寺
と言て湖上の琴を少とりに分なるに白虎通
に日琴在南方鐘在西方琴くくすくくくく変

また同一義を弾ずるなり近却の意
よりいへるなりとなり源氏松風の巻にみえたり
のひきてこれをうつしかたちをかへ又ちらをかへこのうつ
ひきうつしてその形今のごとく狭衣
日琵琶をとりよせて姫君にまゐらせ二絃
をうつ弾ずるにいとうるはしき声なり
唱歌をうたはせてこのきうりし同しいろの
ものうるてはうたる又倫渡日子与人歌而後必使
返之而後和之

京ふるさとをゆるしてえせを放さう
声よきを念仏藪を奏つる
一書に茅白琴ふしくて借るとを弾ずるす
とをもをもしくふ陪てそのえせを弾きそつわ
れとも弾得てまたくはや養心をそなくなり

より無益なり助け得ずして敗生の自ら
まして意心不義の見識をもうるなり次ハ
前自ら為をを弾つとのよう義心のうちをえ
ちうう略　爲考白虎通に曰琴禁也禁示
止於邪以正人心也又風俗通に曰琴之爲言禁
也雅之言正也言君子守正以自禁也夫以
心雅之聲動感正實故善心勝邪悪禁又樂
書に曰琴動天地感鬼神その用しちう
をもつくるなり引ずをのの人服より
内清うるに終日弾ずれて今やうつらむと
するに湖上の曲声に和とうき番れ魚をの
ちうに湖中一手ひるるちうまるまて琴れ
徳をもるをしうに去る一次の自ら又るに
ゆへにそのえせを放ちうるそとしいに蔡越の

[illegible]仏を[illegible]てとめて後世をたすけとる
教主[illegible]の甚[illegible]やすりくこと[illegible]心[illegible]ひろうこまて
[illegible]ちゆうと又[illegible]仏の徳を[illegible]ハきしるり琴
と[illegible]仏とまて中の[illegible]世的れ心を改悔をしむ
応琴[illegible]時く[illegible]仏[illegible]きこのゆへ[illegible]白[illegible]へ
て後白一奪[illegible]ものと[illegible]れ日三四の要[illegible]
[illegible]　花　魂　[illegible]　[illegible]入
その[illegible]の日を我[illegible]　[illegible]
一書に西切上人ねこ[illegible]花れ[illegible]
死[illegible]むこのき[illegible]れ[illegible]月の[illegible]二[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]れ意[illegible]て祖[illegible]の日をねこ[illegible]
[illegible]むきる[illegible]　為考[illegible]揚白[illegible]その[illegible]をねる
[illegible]ちる[illegible]花の白この全体西行れ[illegible]
の中[illegible]こと[illegible]の引色みて[illegible]

山家集に[illegible]心の[illegible]
[illegible]れ[illegible]て[illegible]
[illegible]一名人[illegible]
[illegible]人の自[illegible]
[illegible]あり但一首[illegible]二首[illegible]
[illegible]ハい[illegible]

[illegible]波津に[illegible]火焼[illegible]
一書に万葉集人丸[illegible]
[illegible]と己の妻[illegible]
炭賣の[illegible]の妻[illegible]
一書に汝の[illegible]
妻[illegible]
[illegible]むと[illegible]

[illegible]

中略 炭賣孔書を思ひとく

[illegible]

意を人に[illegible]

[illegible]

人の粧ひを鏡とし

一書に書く鏡を負ひて炭を今新し実を

炭賣に鏡磨の對にして炭うりのようにまとう

よ鏡をきれ清きを惜しむるなりとて

花蘇馬骨の書小咲ひ

一書に初の五字花蘇と云れ書のまをを

[illegible]

の義と曲義をまうけ[illegible]百の中に置る

平自[illegible]一[illegible]花を文字器の[illegible]三

[illegible]

略 [illegible]

[illegible]又同書に芋を田[illegible]この世
て里者し　宗因　[illegible]山れ松[illegible]ゆき
[illegible]　專順　[illegible]の里の半　植樹[illegible]　[illegible]
[illegible]れ第三[illegible]
誠[illegible]第三の[illegible]
三[illegible]の論[illegible]と云て　一書に芋を[illegible]
組合の第三[illegible]
又醋[illegible]れ[illegible]
[illegible]
七[illegible]れ伝[illegible]
[illegible]
[illegible]十[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の法[illegible]
[illegible]第三[illegible]
第後[illegible]
[illegible]
何[illegible]
て第三の本意とする[illegible]
安く得られし近[illegible]
故洞書を[illegible]心身つき事[illegible]

鶴　[illegible]　窓　れ　月のすの[illegible]
一書に芋蘇を窓[illegible]
[illegible]の表と[illegible]
もれ[illegible]
幽[illegible]林和靖の[illegible]
と云く　[illegible]

の健やかなる色を潜まんとする処ありて鶯を
附するなり焦氏筆乗に曰鶯愛陰悪陽
易に曰鳴鶴在陰故に雨鶯好霜故に霜
さまたげ書に曰鶴唳天聞るなり鶴に雀を
の咲花の糸物なりまた二月花をれひらなり
風吹ぬ秋の日　鶴に酒なき日
一書に秋の日のさびしきに風さへ鶴
の酒をへなくて寂莫の言葉なりと
あるべし風吹ぬとは大に非なり秋の日はさび
しきものなり鶴の酒なきに到秋風の法
まさにうく吹ましいなるなり必ふの心なる物に
手のゆとなるべしまた一書に五節先生の傳
なりとするも非なり
萩織る笠を市にうらすれ

一書に萩の花笠とする非なり萩と萩
との写し違ひこの　一書に酒なきといふなり
萩をて造る笠を市に出して賣らすなり
加茂川地胡麻の紙に擬せり
一書に加茂の川とする非なり　稲荷の神字此時の
好事なるものとしてその社あり悪く胡麻を植
に一本も枯なるなり故に此時に生ず胡麻
多代なりと云なり又この社を云
一書に前の白丸笠を
ふ附なるべし稲荷の社なるべ
午九月に時雨の有
いまだらの　舞鶴
一書に岩倉に鞠る迄きなりて加茂に岩

金を活かすべきを勇の美徳として
ものを惜まず来たるに附すべし　愚老岩
倉の中方より切り加義より付くる者則ち思ふ
ものを恒武帝玉蝶を結び護の為めとして三宝を
崇めたまひし地なり布橋記に笑まるて
枯れたる布橋記に笑まるて　平
うきたるを越すべし　恵女を附すべし　三平
一書に笑まるてとて恵女を附すべし　成義曰容
を三平二満として乙酉の年　愚考二十と誤るべし
侍に三平二満過則休
を乳記曰十五両年二十両嫁故あるを二十三
花は泣橋の懲として　捨　ふけ　ふ
一書に橋のもり弱るを枯れひくるを思ふの
花を祝想しくつ附すべし　成義の曰松

ものを法ものを懲るものを花
ものをものを懲るとなり　ものを花
一書に橋の懲を　夜のこのひるの夜の殿を
願を賞へしと云く　愚考前の日秋に居て花を求め
ものを祝想心裏の妙華に　て以心伝心大切の
場を変とをなく現とをもなく探を得るに花にアッ
と呼に拍子に彼網を　きく　当に
ものき全心に　て　心を陽　て　を
橋に懲を妄想なるとなり
泣と虚に伝ものを　を
をひらこのむと歓冬
あらをしを滅に　の
に絶をを花の　ひと
論前後のうたて　一日

懲の字此書横に寫まちり
得るのひまり 数冬をのむ
一書に花の親ありより無言禅師なとも見出
しまらむ得ぬ通昭いふさ良峯の宗貞と
ゆきし時好色なるに出家して帝座の客に
て数冬色の旧衣を着て旧宮の御に法
しまた宗貞けさうしまるに散て旧いきたなり
をよきしちのち山吹の花いろ衣ぬしやそきこそ
とまさくはらち則しましてそれよりの山吹をい
まぬいろと縁来まり盧栗子山吹や無言禅師の
擔衣きす下衣の綠礬色なくないなしまて染る
なのこ此ら山吹といふて其まにのいとなりとよ
一書に香と作りるを山吹も此露の盛る下利
きるへし茶綠とのりまれ香とのふりまて雑まされ

とりよへし
愚考花のひめよりも蚊釵とるゝ給
事なきや釵出ててるの魂なりまほとて此を母を生し
まされとその兒女よりもまとすゑき此釵なり
成美曰西京雜記曰元后在家嘗有白燕銜白
石大如指墜后績筐中后取之石自割為二中
有文曰天地后乃合之遂還合乃宝釵又遊仙
窟に白燕飛来白玉釵 一書に白燕を日本に
なつきくさるなのなしとく玄宗皇帝楊貴妃か釵を鑄
さとなりしとなりしと云く 愚考非なりなん白きもの
を称なりしといふとも既に景行天皇八年天智
天皇六年清和天皇八年白燕を献るされハ
燕雀の類をまれ見る事ありとてその兒女と
いふる倭姫なり和論語に曰兒女の部に云
伊勢齋宮神道之大祖也日本神道以天女

為根本則天女しるく倭姫命されと日本神代
の祖ゝして御歳五百余歳ゝして石隠ゝ
今此隠ゝ国是ゝ本朝ゝ公及の貴女と謂つ
へし根本しるく倭姫世記等を引してう
さうひをそらす一しさて秋ゝ来ゝ
ゝ野の宮ゝ三年ゝ秋ありて既隠りの
日ゝ来りて天子自此榊を秋宮の御玉柿
加一ゝ花を別ゝの花ゝ榊ゝ串ゝ髮
花ゝ伊勢の横田川ゝ橋姫の社榊を為し
ゝ来ゝ横田の神社なり
八十峯を三つゝ重ゝ
一書ゝ銀を鑄ゝと云ゝ神籠此時位の清賀
と云ゝ入法国より来ゝ寿の人を求ゝ熊向又ゝ
老業ゝの侍ゝ仙りゝ又ゝ

ゝ季ゝ也ゝ法ゝ国ゝ来ゝ
食数の経あり村越納豆ゝ
過ゝ季ゝ
数ゝ
ゝのさゝ此ゝ
のまむとする山路の新ゝ法ゝ
のむとゝ
樹下一樹今日誰共開見ゝ枇杷ゝ又新後
捨遺集ゝ山路此花越波ゝ
法ゝ
花の新ゝ
のゝ法ゝ
時飢国陽夢待学士者飢麟草此外東
嫂の門冬之歌等ゝ其例ゝ

白燕

宣旨

一書に白燕を泰山の清泉に浴して栖の清らかなるを見て
しるしむ本草云人見白燕主生貴女故燕名
天女次を洞冥記曰漢元鳳之間招昊閣有神
女留玉釵与帝帝以賜趙婕妤至昭帝元鳳
中復見此釵宮人謀欲碎之明日視釵匣唯見
白燕外天　一書に燕の一名を天女といひ又白
燕を生んだ貴女を生ずるといふ故事なるべし
なりその貴女ようして釵を鑄たるを宣旨の
下まうと附らるべしさて此宣旨のことく
てやはり釵をのうつしたるなるべしと
ぬしひもよりも釵と虚ふ仮くしたる例のあれば

一書に八十を三つ重ねるといふ
一云二百四十巻その意ふ毋なりこれを見てそ甚むつ
又上の八の字を抜きのなやまりといふを非と
又八十氏川八宇葬を見るの説まて只数の多きこと
いまたなり又七十三才にして八十を二つ重ねて八十を
三つ重ねるといふ説なり是ふ重ねるを忌とする
等是日多喜安元法眼のもの語ふ白燕を探ちふ
すまるとあり肥然城中ふ白燕なり城内へ出るを
見る事を予ねて見たるその外白燕を見る事
三度法然上人の説として雑事を集めり書れ中
ふ曰大和国行林の叢上ふ集りて動して神武帝
の玉釵を鑄ふ法国ふ動してのひて百巻以上の
男子ふ新を為るものを石集て是ふ役たしむ
是玉冠を鑄るの例なり行林叢を拾て美

地をまもるものは我家に佛舎を開かむ事を欲
す下略 此古支筆なりて此三句は如何なる不審
なれば八十年を三ツ見るまでと行ひするなるの
日かずは四万三千八百日なるに今は百
算といふ壽命は是をはじめとすまじと世に云ひて天地の
気弱くなりゆくほどに人間の壽命みじかく
なりて鳥獣草木まで皆不及なりて
ありし此時代まで人生まれてはじめより
うらみなる侍りと云々
魚秀白燕の図を女に与
一八十歳の侍りにいふ 神武帝の玉鉞一と書せり
まかりなる前のよりは儀振を修し神武に在位
し其歳に負ぬ者ある後の世まで歳一に以て
親妻ひらきて其かたの仰りなり
なれば武ちや是むかし七夕は伝所

一書に云 昔織女の不孝より遠流せらるゝ
らむ 織女は天帝の娘 河西の牽牛と夫婦たり
より織るわざを怠りしにて父母ゆるさず 天帝大いに
いかりたまひ中をさけて天の川を隔て七月七日
一夜のみ逢ふことをゆるしたまふといふ 是則中を断
神なるべし 一書に二百四十年の昔とかや凡人
なりて上の枝かくし 仙人せまりてへきなるまじ
とまを隔りて袁に林 和緒の傍に前に出て佗
その外にも去れ人をさしてきて天人那分
下しと見て七夕の書を仲人なりと秋季を
備へる 富 言傍のなきる下しと云々
書の荒満よし物まじへなとしめてとしよ一
夜をゆるしたるを中隔 神々の腰かけてあふさら
神のと仮まじるなりと云々 魚秀 蝶 神のよ如し人 其山田七夕の

澤のを[illegible]れた中に初めて[illegible]
隅ちの[illegible]
西南の方　桂の花咲かず　時
一書に云ふ七月の月の[illegible]桂の花を月の
[illegible]て花の喩[illegible]十五日を[illegible]盛りにして七夕
[illegible]いふを答とす　[illegible]
三日[illegible]を答といふ[illegible]の本源を紀さ
[illegible]ての杜撰なり七日の月を[illegible]て月[illegible]答と
利[illegible]ふ[illegible]七日[illegible]月を一日[illegible]の月[illegible]
十五日を月華なりとして[illegible]を答とする[illegible]
蘭の[illegible]ト　木　二ノ[illegible]　[illegible]
一書に云ふ[illegible]の隅なり[illegible]菜油菜膏として[illegible]
[illegible]なり陳義器に曰ふ菜草生澤畔婦人
和油澤頭故曰菜沃秋の夜の[illegible]

[illegible]けて家業を[illegible]本中れ人の油[illegible]
綫の家に哭[illegible]女[illegible]神[illegible]
[illegible]考琴操に曰ふ孔子蘭の独秀[illegible]を見て歎して
曰ふ夫蘭を王者の香[illegible]として琴を[illegible]操と号す淮南子に曰ふ蘭を男[illegible]
[illegible]香[illegible]女子[illegible]を[illegible]
花を[illegible]香芳[illegible]
[illegible]女を綫家に[illegible]
[illegible]の人にして[illegible]非なり西行上人が江
口の君の[illegible]夜[illegible]
[illegible]
[illegible]中り[illegible]
一書に疱瘡や麻疹の[illegible]

て拾ふ事なり一説に栗饅頭なりかやうの物語なりて
一入おもしろし

鞍馬寺向敬　弁慶社宮

一書に云ふ毎年正月の晦日に其の国の俗を
陸奥の果なる人見て弁慶の宮に祈
樂鼓を打て毎向ふなる一説に未殘
なりを紙に包て毎向を色毎向といふ名
おそろしく名物なり

寅社日の旦を報治社起て
一書に弁慶の宮に参り見入て力士の武仙
を祈り是為仏を報一説にはひよも寅の
日の未明に対を潜めて系語の如く
一書に台命を蒙りて為物の釵を新し
と意敬を起すに私のちろに及ばされハ

勇者の社に参詣して寅の一字を彫起の
箸を手人の刺名なり手将莫郎天國正宗に
この手なる名なる人の名なり私のちろにおれ
よひろしとなる物なりやさしいに人に台命
をやさしやや又寅の一字を彫起のひきを
ちし法華社裏河なる支天を子まもりけ
地を丑に人を寅に故に子に卯寅
に起なる天地自然なり寅を猛獣なりて
司の敵に寅社日を祈に力士の考なる一し
宮年宮月寅社日に手なる力を三寅と号し
て伊豆権現に納わしとなりさすれて寅ハ
一分社眼なり

雲なり　そしき　南京の地

一書に南京を南都といふなり一書に
を力工の多く富ませるゆゑ雲うくたり
きを皇都の地なるゆゑ崇敬の初なるむ
一書に于將をむかひを南京の地とを隆
らむ南京之来吳の地なれなり　略　遠考
吳の于將を非るゝ言野刺刀を元刀を良に
必定をり

ゐうきして達とるを人の像

一書に素良は所を僅なるまして圖雖ゆへして
て在を太閤秀吉その人舎弟大和大納言長
の像なりを今を和の農文を考ふ此の考と
遠案荷より不別に論有

心の方なるし字押やめて
祈ら達ぬ義を考むらる

一書に初條の名殘伐をしみ保元をしと思ふ
姿なるむ次をその人はひとり舞のものなる
まて二白一意なり　遠考先一白の吟味大切な
武士なるまを鎧のに上に物衣を也ハ武
士なるまを堂上の佛なるゆゑに物衣の下に
鎧かとハをしものゝ武士を鎧ハ佛なり公卿ハ
物衣の体こされを此二白は佛源平盛衰記平
家物語の佛にいふ物とも佛を佛なる
しかをや初條を遠るに武士の戸あと成て
なるし字押やめの紙なるむや佛に曰村雨を
なるに物をひて物を細なり安事にひまを
てを四月を七月に佛ら事に此附字に事外
とをを四月のうらなるを事に村雨を佛
てを明四月はうらるを鶴百翁の中に秀

しく論す

因家眺望

霜月や鶴の子くちびる青て

冬の月彩日の月の白を見るなり

一書に此脚を余情紙毫に法てしるしたるを

の日の月影号を見るなり詩さもの眼を

いく度も此句を味ひひてすきのよきこと　一書に

さの眼見能の説に云めて篇の見出し中に

まる句なるしみまて此句高しゆへに下に

そうと云ふ説く云流し中されるうるう巣ろに

此句を句と形く舌代の歌の上の句を作る

併句れたる此句の心まてるうるうといひ付け

ふるむ　一書に鶴の

まて句に表を見るるの三脚究て新し

それを句まるるまるわと作るる意味余情

いく一るる不可説くくまて見て見を解する問を

却て第二義に義一きるる下略　愚考俗諸

見かとまるまれとるるるるの脚をまて歌号と

するとるる古今の歌説句故に実神に歌号の

説を論しるるるるるるるるるるるるるるるるるる

又服の句余情紙毫に法るるるるるるるるるる

見を解るる却て二義に義一きる脚を句の余情と

又言るる此上やなる一きる脚を句の余情と句の

るるるるの本侍るる若句るるるるる

一見余情のなるるるる鶴を水鳥象類集曰

水鳥者稟陰鶴鶴亦夜鳴又禽経曰鶴伏鳴則

陰仰鳴則晴又爾陽雜俎曰蛙抱聲鶴抱影夜

[illegible]

勿論なり首うちそらしうるのつとなり
さ日の歌をうたしまの二字まて分自の
余情をいちし海うり歌はいさ日まるを
只物をれるうとと云流まうるうくてを
二義を為るやいを鶯抱歌とを是なり

櫻接山家れ侍を本紫 降

一書を二るを陽のるれて京三をの陽を定
うるり京三茅の論しあれ 愚考一説本紫
うてとしてのをを入て学てとりを非なり
一るれ讀を先心を生しを本紫うとしを自
るり降を眼茅うてを直去るり壁接の表
を凍てなり歌へ歌をうけてうとと報日のうち
きるり本のを降茅てなりを山家の侍と

見てを死るるり田家の庭茅るり本紫のある
を見をを山家の侍なりるを作とるり侍と
りを字を眼を注けて味りを一
ひき注るうしの埴を不き注て
一書を見を形のうち注くるり京なるをてを
の吟時をうくを不き京りをして置て簡
てうをを形うとこをを不をりやう
るりるの山をりをを京いの歌
きをを生をひき注るやうを心生をのひき注うる
注を解す一きるを京一るれ魂をを生をの
をうを知の類向をるを京をて京りるを本の
茅降るをとを注て注自中を生をを生て知をは
必定るりるの歌をるを生を心むるのるを生は引るる
とを増るり牛の性をを知を生を知りを河は

進まんと欲する引張らるるを牛
を進めたるものなり一説の如く
なるべし雅言故事曰埒雅曰牛走順風
馬走逆風

五月のうすし　五月のうすしと
一書に陳琳が檄に曰く昔者武王
飾車百乗と云ふ甲冑の軍場の侍を
無者大りくよりしてまた生れ詮といふものの
見えぬるを引張る牛を
一名れ掃様なる者にて
とといふむの月といふ字
英名の月をもて出す
あるり世話しきふもあ
又字をもて涼勢の意味

ものねを解きぬるなり　世説新語補曰晉文臣猶
呉牛見月而喘又風俗通曰呉地ハ南
の果りにて暑甚しきの類なるゆへ五月
を見てもて又喘くなりと云ふ故五月を見て更
ふ道まねを引張ると云ふ
なを引張る牛をもれるなり此月
酬　ちう　蓋　葉　切　いて
幽葉集に葉切りと書て出しかを云語
日ひなり手れ見らくなるの為なるてるまハ
必見後しを忘れてのるるむなるハ居てるう
見る葉切り出と出と一名れ栞懸陽と
一書に血ふの酒蓋と新向を定め大將ふ花
方の蓋仏の花を生むとすれば
余情なり此注なるを蓋の福なるしを新

なりてその罪をけすべしみ
ぶれば法華の法連歌いとこうわま
潮ゆえて富士　見ゆる寺
一書に都なれば寺を座上の活花なり寺を
法上活花に向後沢抵沢抵の同の法連
歌なるべし　一書に法連歌といふは法見寺の
そなりて陽を究て三国無双の不老と傳へる薬
の一字に力なり　無考法見寺とそなるそや
いなるべしは先注をそのやうに云ふべし富士
見ゆる寺なるべしとて法見寺の
河の内に寺なるべしは法見寺なるべきの寺
なるべしなりうこいてそ決して海道なるべ
しうこときそこなるべしは後のなるべし相列
なるべし富士ゆえ潮ゆえて力を入富士

見ゆる寺とを禁ずるの字のうときう
上に東海道をなるべしなこれなるべしの吹の
なるべし論なり

寺ゆえて樹の花の　薬の香
薬に薬の香　むろ咲の香
一書に薬いろに薬を薄るといふをゆえ
ハ云ひけるなり樹に掛竿に余腰にあるべし
一書に小京枝の立れる蘇天のさるを傳てそ
るる新薬の自ひをもるもせるる一
いるべる非るる薬の木に事枝のるに法をもて
薬の自ひをるの吹に寺といふるるり
雑遊に　鳥帽子の女五三十
一書に宴にるる義仲の豊楽に巴山吹をの
の女中に立ることを鳥帽子物衣るべしとを義

作るなり　拾無の俳句なるべし

屋　木芍　俳句古今の舊衣

一書に近代なる法度式の作者茅舎なる人の句を海内
或は木芍語の京色を
極向なるべしなるべし　銀遊といふより全く
木芍語うこと　一書に木芍山の墨系をつく
らるる花子の家の大意なるべし一一意の舊衣と
なるべし書の粧なるべし

文政きく山　福　ふさらるべし

成美曰古今集業雅にの注山嶺を世俗やふ
ることといひて実赤し髮をきの問山芍に添
ふ芍なるべし大和本草訓手拭木為郭麻多
知波赤其形狀赤全今云義拭なるべし
愚考八雲御抄云山タ千八十を牡丹なるべし又橙之

と云ふ　牡丹の対物なるべし　花奢の俳
を好むの附なるべし　梅と牡丹を一対に見べ
きて木芍語なるの義なるべし対すべし次の
麻刈といふ集を寓云なるべし　猩樂唐土なるべ
対なるべし　紅を近くと附なるべ　近なるべ
なるべしとなるべし　我月出なるべ
なる出実相の月なるべし　我月出なるべ
義花を附て宿は甲斐なるべきと人のさなるべ

旅宿　留は義花を寄拂ひ
義奥　ゆるす　木瓜の山吹なり

義奥義花を不吉のなるべし　流人の俳を
附なるべしなるべしといふべし故なり
本草曰利筋骨去濕熱治産乱轉筋脚
気腫痛腰足無力又轉物志曰木瓜味酢善療轉

節の轉節時但呼木瓜名亦上書木瓜之字輙
愈留之義花之義橘の曲なり公卿の因人ふ
てれいすりなり当路の出賞をいさくり系らるむ
とれもしたてけて行ひとふ書ひるうう能山名
まそて人まるまえ風の花の盛ふ以ていの
ふをえ鉦鼓より出し系らるまる明さく
るしまて指まふ和義の留を一曲拍ハさ行しおうら
らうる花を留うう出し寸薄ひまふ貸るる色
しまふとしひ山間といひうしう鑿間の武士の心
なを陪うそ一うるる茶白ふ不吉の義花の
是ハ次ふ骨を見てとを陪ふるう
玄食の義をまらふえのくめ
一書ふ骨を見てといふより戦場の貸と見て
その由緒の人のとくろを葬らむと心ずそこら

ふ居合をうるを食の義を玄文て骨を色み
て陪うむとする人の貸るり
流れ上ふ尾を引程を拾ひ拍て
墨亨骨を色むとしふ義をふ一紀をひ付け
るく拍ひ陪る程を色むを色むと奪ふくるるる
洪ふまむ明りしき注釈ふまとる中ふ及えい
序章ふ進む　水　れ　みえる
一書ふ天濃國養老の瀧るむとの清書と
見出し活程を獻ふ余勝ふなるむ　一書ふ
直を陪るとしふより一勝して門勝の清書と
陪うり流のかくきふ典業改水毒を解する
をりをるとるるる一　歳美曰
続日本紀曰養老元年詔曰朕今年九月到
美濃國不破行宮留連数日因覧當耆郡

多度山美泉自鹽手面皮膚如滑亦流病所
無不除愈云　勇評い[illegible]
[illegible]　勇考小角豆　炭團　芋子　[illegible]蓮の
実月の蔕　狐好糖　此七ツ[illegible]
[illegible]
川狸[illegible]
[illegible]
霧　[illegible]　狐[illegible]や　[illegible]
勇考[illegible]
帝十六年[illegible]
曰巣居知風穴居知雨狐[illegible]
[illegible]
源更[illegible]
一面[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

孝心ある人にて養ひ方延山に師し
紙しの法を学ぶ延山の門流の才物法華一派
の師なり初狂名を続隠逸傳にあり　藏美
日元海を表振奏の家士俗称石井平兵衛二十六
歳にして薙髪為僧源学禅寺を革創す四十
六歳にして寂

伏見　木　犢　の　種　花　を　う

夏秀源学の花を伏見木犢の入相のうぶ
花やちるすと俗にうたふ源学は墓源樹と名る京
なり古今哀傷の部源学は墓辺の樹しの心な
らんとにて　うたうたう墓源学は墓八園蘇帝
の心を墓ひらの例等雄のよめる歌なり此
歌によりてすみそめ樹とうたふ名つけしなり
東犢をユロタとよむ一説に方言なり強田と書る

きまを形なり

いろうすき男猫ひとうを抜きて
雪のちすれ　雪　くきくとく

一書に入なひの民なる男猫のうつらさるを女
原の多はねとなるより吹れ白き猫を
毒気を形なるもの也一雪掃をよりうう
家にうすき女三の宮の猫なるもの　夏秀
男猫と押出して白猫なるの猫の本性と
毒なる男猫の女猫を恋ひ林なる女猫の男猫をうる

水　手　を　秀　白　れ　蟹　若　や　の　ホ

山　菜　花　に　ホ　ウ　し　笠　の　ホ　ウ　し

愚考此二句則冬れ日一部を巻納めるる白
ひとりて首尾連環の格なり巻頭の狂句の
二字を冬しうる秀白れ二字なり冬きまを狂句

の二字をも大切の字眼とそうし侍る日揚台より
はじめて物を起さんに出の揚台をしめて是書
を出するなり二台一対にして巻物の太さうす
し服の山茶花を合せて秀句を狂台
の連環なるゆへより格分の格芝格を出てしめ
めて自在を得ると云て此てなり近年れ俳書ふ
揚台より始めて意台を出し或をしめて
事を出すを出すなり侍の類なるべし一新まを
一巻ものをよ文ふ沙汰の揚台を書今ふ
例なるべき一格なる格分弁ふ古書を渡せしを
いなる事なるべしこれ大切の要なるを

追加

いろはとて雅面うしをうの霰

一書ふ牛の祝きりの霰の烈きを敬
向とをり電者砲也中物如砲也下略　勇秀
夫木集ふ莉小因の略の上をふる霰也ま
てをるとうはとそ見る又行助此古歌元て
いてしをを玉をもてをるを因世の霰をの和歌
といひ連歌といひ只一台のかりをみのみ
執為て殺伐ふ義しそまを我祖義の
義略てをの仁情の境ふ見入をひけまハ
蕉風の世とを一統をり古人の内をふ
ものを学うてひをふるををふのハ力
はをくして為をりとまを夫を為ふ事なををを
むをいう形をむと牛の法をきものふ事をく
はをれをとををる事をの事なり
橘大ふあをう　桔梗れ松

一書に牛酒の事宮のうの金津にまうして城
油をもて地面一附焼牛に牛十かと焼く一連
に近りの所に牛の骨をもて根まりの所を
治の度ごとに牛を負ふ所に卧し牛酒
俗に鍾馗と云ふ牛を焼て酒を壺の底すりすりと
と拾ひあつめて焼く酒を壺の底すりすりと
めをして休む所にて焼の根を集めて焼
牛の頭に牛を焼て酒をきらきらと歩りと壮年
の時の法にこの故に所にして見物をとる
一説に曰焼を火葬の事にこの故に
拾ひ集めて焼の骨を焼火にして焼りの
酒をもてこめて喜び夜をもて焼火とする
ものを俗此の夜火を焼火と云ひ
て焼火に焼れ出し

人足の骨の初めの根をもて焼く
のものをもて焼の根を集めて
夜に焼集めて焼の大体此俗に焼ていい
焼る者古の者なり

木綿苅下品に菜を菜をむしして
一書に曰体のなりして木綿苅を見出し
なるなり菜荒繁を油を食に焼て一不未
ねるなり下品を食べてくらせ羊をむしといふ膳体
なるむ　一書に焼火といふを庭燎或は火
焼るもの神なりと云て神いさめの紙と謂る
なるなり　惡考木綿苅を秋麻をもて
なる神なりなりなるなり神なる
の法法をいふなるなるなるなる
なりれ出なるなり

接ぎ合ふ宮をやしなす　露

一書に曰く、高皇産霊尊、まづ用明天皇、いまし皇子に
てましましける時、彼玉代姫を惑ひて、菊に比へ
しに、貸りて　一書に宮方は、蘆に、ありて
供奉の人、杳に知らず、海に出でて、うしなふ貸りて
一し

親に　恰　の　ふる　月　を　海
ひかりに　恰　を　すす　岐阜　山

一書に、大嬢、宮に、の、漁師、ふる、て、祝に
恰賞、を、むと、形、む、次、を、燒、恰、の、素、宮、と、宮、て
たふ、恰、を、すう、右、に、岐阜山、を、見る、眼、為く　一書に
表、と、り、れ、問、を、名、百、池、義、を、出、す、る、多、宮、等、蓮、の
多、本、る、の、一し

閉て、六冬の日を計、六日次韻の風調あり、て、れ、
よ、を、の、人、れ、解、す、つ、き、り、の、ふ、の、ふ、と、書、置、し、り、
ど、る、を、稽、しの注釈、出、書、り、て、却、て、俳諧、を、書、に、ふ
、る、形、を、ま、り、る、人、故、に、ふ、雜、陳、る、し、形、き、に、及、一、宣、芝、の
れ、も、を、る、踏、に、ふ、て、り、し、ま、と、古、集、の、解、し、ち、ひ、を
今、れ、た、い、の、以、の、上、に、ふ、及、に、れ、儒、を、る、し、光、れ、ま、る、を
た、を、を、を、い、ま、ふ、を、し、て、言、結、め、む、と、す、る、筆、譯、こ、う
を、ま、き、ひ、し、き、ひ、し、き、る、ま、を、る、る、る、し、ま、を、を、
う、形、う、れ、の、宿、意、ふ、あ、る、を、を、書、に、見、ゆ
る、を、一し

落注

五　形　葉　け　ま　け　六　五

惠秀、前、白、縣、の、花、を、次、序、を、百、蝶、の、大、家、と、見
て、秣、肥、等、れ、附、る、り、貝、原、氏、木、曾、海、の、記、曰、美、濃、国

加納より西そ平因より野系形ゆ馬ホ
飼人いさ草形因烟よまむけ花とりまそ
植て稀とす又そ荊取て因肥します紫
りてそ宝蓋花とりよと云て五形葉と作り
そりそ俳諧の虚りり先注のまりく実ホ五形
葉とりて荒畠とするそ云語因形りの癖案
因法をそりりあ罪人りり